



宮沢清治 著
防災と気象
 一気象災害を防ぐには—
 朝倉書店, B 5 判, 195頁

大気現象のしくみを探る目的には、まず学問上の興味により調査研究をすることがある。つぎに、現在までにわかった知識を社会などに還元して、そこにおける諸活動に利用することがある。その諸活動の大きな1つに防災というものがあり、これは文明がいかに進もうと種々の形で付随するものであると思われる。

しかるに、災害や防災問題については昔より多くの著述があるのにもかかわらず、なおも新しくしかも基本面から、また現代面からも問われつけられている。それは、人間社会の構造が次々改変されてゆき、それに伴って防災問題も変化してゆくからである。

それにもかかわらず、問う人の姿勢は昔とおそらく変わらないと考えられる。それは、人間自体が、いつもその存在を本質的には変らない何ものか—問う姿勢と言ったもの—によって逆に問われつけられているからである。

今回、宮沢さんの本を手にし、この本の内容の幅広さ、わかりやすさ、丁寧さに大変感心して読んだ。それというも、今のべたところの災害と防災に対して問う人の姿勢にも関係してであろう。

序言にもあるように、防災問題としては都市全体をシステムとして考えた総合防災が今や必要になってきていること、災害の実例によって、災害への認識と防災への訓練が養われることを主眼点にしてこの本は書かれている。もちろん著者の豊富な経験に立脚していることは間違いない。

目次は次のようになっている。

1. 日本の気象災害

日本における気象災害の特徴を季節別、種類別、今昔別に概観している。

2. 気象災害を防ぐには

防災に必要な気象観測や天気図の書き方、見方、そして気象の基礎知識と気象資料および利用法が要領よく述べられている。

3. いろいろな気象災害

各種の気象災害を網羅している。これによって気象災害というものがいかに多岐にわたっているか、また同時に複合して起ることの多いかがわかる。

4. 防災気象情報とその利用

気象防災に対する情報や法律を概観している。

このほか参考書や付録(記録集)が付されていて、大変役に立つ。

以上のように、この本はこの方面の第一線の専門家がわずか200頁たらずの中にうまくまとめた好著である。

ただ、しいて今後の著述への要望を述べるとするならば、数個の顕著な気象災害の例をとりあげて、もう少し詳しく解析した結果を紹介されても思ったし、防災に対する社会的対応の例を2~3紹介されたらとも考えたが、その場合、紙面はぐんとオーバーすることだろう。故に著者も断っているように、「さらに学ぶ人々のため」、本書はまず基礎知識を心得ておく必要性を述べたものと解釈される。そして、この本をもとに読者はますます防災と気象に関心をもたれるように希望する。その意味では是非本棚にこの一冊を備えられることをおすすめする。

(内田英治)